

兵庫県現代詩協会 会報55号

2024年7月1日 発行..時里二郎

今年度に向けて会長の挨拶



兵庫県現代詩協会第28回総会で挨拶する時里二郎会長
(於 神戸市中央区文化センター)

兵庫県現代詩協会の2024年度の総会が5月6日に開かれ、今年一年の活動計画が決まりました。この会は、会員のみならずの詩の活動をより深いものにするために、より広がりのあるものにするために——という思いで運営されています。

今年の活動については、まず、会員の詩のアンソロジーである『ひょうご現代詩集2024』の発刊があげられます。通巻17集になります。昨年は、このアンソロジー(通巻16集)の参加者の集いを開いて、たいへん好評でした。自分の作品がどう読まれるのか、あるいはそれぞれの会員の詩についての感想を伝えあうことで、詩のヒントをもらったり。ぜひこの活動も続けていきたいと思っています。

それから、秋の大きな催しである『詩のフェスタひょうご』は、毎年、アクチュアルに活動しておられる詩人をお招きして、ふだんは聞くことのできない貴重なお話の機会を——という願いをこめた催しで、昨年は峯澤典子さんのお話でしたが、有意義な会になりました。

今年、ベオグラード在住の詩人、山崎佳代子さんをお招きします。ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナなど——やむことのない紛争の時代に私たちは生きています。ユーゴスラビア紛争下——NATOのベオグラード空襲を経験された彼女にとって、詩を書くこと、言葉をつむぐことの意義など、大切なお話が聞けるのではないかと期待しています。

さらに、昨年度から、新しい会員を募って、協会の活動の活性化をはかろうという企画が始まったのですが、今年度も継続して会員拡大を願っています。

ほかに、恒例の『ボエム&アートコレクション』の開催、読書会、文学紀行などの行事を用意しています。ぜひ多くの会員の方の参加を心から願っています。

時里二郎



事務局長：野口幸雄 議長：江口節

■兵庫県現代詩協会第28回定期総会報告

2024年5月6日(月・祝)神戸市中央区文化センター1101号室において行われた。定刻に始まり、時里二郎会長が開会の辞を述べ、今年度の協会の取り組みや詩のフェスタひょうご2024の講師として山崎佳代子氏をお招きすることなどを報告した。

次に議長選出に移り江口節会員が選ばれ、参加者34名、委任状30通と報告し総会が成立することが報告された。

議事進行は次の通り。

- | | |
|---------------|-----------|
| ①入退会者報告 | 事務局長 野口幸雄 |
| ②2023年度活動報告 | 同 |
| ③2023年度決算報告 | 会計担当 玉川侑香 |
| ④2023年度決算監査報告 | 監事 梅村光明 |
| ⑤2024年度活動計画案 | 野口幸雄 |
| ⑥2024年度予算案 | 玉川侑香 |
- 全ての議案に対して、賛成多数で承認された。
〈今年度の活動計画〉
- ①総会

②名簿作成
③会報発行

④読書会

⑤詩のフェスタひょうご2024

⑥会員拡大にむけての活動

⑦役員選挙

⑧アンソロジー発行

⑨文学紀行

⑩日本現代詩人会ゼミナール2025 in 神戸

⑪ポエム&アートコレクション

⑫ホームページの活用

休憩の後第2部が大西隆志氏の司会で始まった。今回の講師涸沢純平氏が「出版というかけがえのない出会い」について講演した。次に新人会員の有松きょうこ、佐々木晶子、土居靖子、とし総子、松浦三津子各氏の紹介、朗読が行われた。閉会の挨拶を神田さよ副会長が行い、総会は終了した。

報告 野口幸雄

■総会第2部 編集工房ノア・涸沢純平さん 講演レポート+a

文 大西隆志

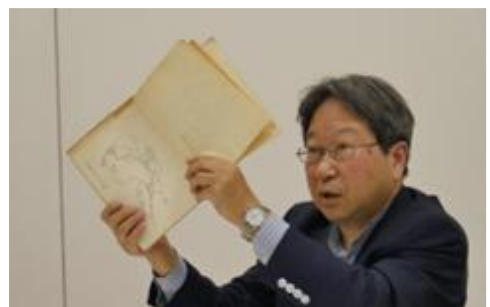
ゆっくりとユーモラスに話し始められた涸沢純平さん。兵庫県現代詩協会の第28回定期総会での記念講演は、「出版というかけがえのない出会い」と題されていた。2023年11月発行の『神奈川大学評論』に発表された文章のコピー一枚が道標の役割。編集者のおぼえ書きがサブタイトル。大阪の地において文芸書、それも詩歌を中心とした出版社「編集工房ノア」の代表者で編集者の涸沢純平さん。今回の講演は涸沢さんの自著『遅れ時計の詩人——編集工房ノア著者追悼記』、『やちまたの人——編集工房ノア著者追悼記』など、活字になっていない事柄も重複するだろうが、文字からこぼれ落ちる肉声にはくは凄く興味があった。

編集工房ノアは毎日出版文化賞や梓会出版文化賞特別賞などを受けられていて、関西の地方出版社としては50

年近くの歴史があり、兵庫県現代詩協会とは縁が深い。鬼籍に入られた会長の安水稔和さん、伊勢田史郎さんや、顧問だった杉山平一さんなどの書籍、それに会員の詩集、エッセイ集なども多数出版されている。関西在住者の詩人・作家たちの著書の刊行、とくに詩集の刊行に力を注がれ、鶴見俊輔さんが言った「ノアは十九世紀の出版を思わせる」は、ある種の遅れ時計の出版社でもあるのかもしれない、文芸書への矜持を持った出版社だと思う。

個人的には、詩人涸沢純平さんとの出会いから生まれた詩誌『四階』のこともあった。編集工房ノアが誕生したのが、1975年9月で、涸沢さんが29歳の時。現在の事務所は大阪市北区中津3丁目だが、ぼくが始めて編集工房ノアを訪ねたのはその前の大阪市淀区豊崎5丁目にあつた事務所だった。公園の近くだったと記憶している。その近くにはライブハウスのミノヤホールがあり、フオークグループ〈五つの赤い風船〉のメンバー、故・中川イサトさんが重鎮のようによく出演されていた。ソロになられてからはギターリストのイメージが強く、多分デビュー前の押尾コタローさんも弟子のように付いていた。そのミノヤホールをたまには覗いていたので、ノアには距離感の近さを感じて親しみを抱いていた。四階第1号は1983年1月に出ていた。涸沢さんの編集後記を見ると、1982年12月8日はぼくと涸沢さんとの初対面だったようだ。そして、酒の勢いもあったのか、美術家の倉本修さん、詩人の阪本周三さん、そして涸沢純平さんとぼくの四人。よみとしては、しかない、となった。編集工房ノア気分で四階の会が始まり、月二回というスピードでスタートを切った。そして涸沢さんは詩人に戻ったのだ。話が逸れてしまったが、29才で出版社を始めた涸沢さんと同じような歳にぼくは涸沢さんに出会ったことになる。

今回の講演では、創業第一冊の港野喜代子詩集『凍り絵』のエピソードから語りが始まった。編集出版とは、弔い事だなぁ、は重い言葉だ。そして清水正一さんの詩集出版での交流の中から、涸沢さん自身の出身地、京都府舞鶴が語られた。それは清水さんのことを父とも、港野さんのことを母とも思った心模様でもある。それは淀川右岸の十三



講演する涸沢純平氏

の蒲鉾職人の清水正一さんの現実を詩の世界に置き換える時間を切り取るよう。そして恩義を受けたとする足立巻一さんの呼吸のままの文体の丁寧な説明、京都の詩人天野忠さんの書名についての話は面白いと思った。

出版にまつわる一齣一齣、涸沢純平さんの自著の帯裏には「大阪淀川のほとり、中津の路地裏の出版社。港野喜代子、永瀬清子、清水正一、黒瀬勝巳、天野忠、大野新、富士正晴、東秀三、中石孝、足立巻一、庄野英二、杉山平一、桑島玄二、鶴見俊輔、塔和子。本づくり、出会いの記録」とあり、涸沢さんの出会いと別れの著者たちの名前を聞いて、出版というかけがえのない仕事の意味を教えられたように感じた。人間の丁寧な記録は文芸への信頼を語っているのではないかな。

■第13回ポエム&アートコレクション

1月11日(木)から16日(火)まで、ポエム&アートコレクション展が神戸文学館で開催された。会員の詩とアート作品(絵画・書・写真・オブジェ等々)が展示され、会期中135名の来館者があった。飾りつけ当日から「あーでもない、こーでもない」と、如何に見せるか、見て頂けるかと思いつきながらの展示だった。久々の出会いもあってか、出展者同士、話も弾み、賑わった。

今年の出展会員は17名(阿部由子・飯島小百合・大西隆志・河原真紀・後藤益男・玉井洋子・高木敏克・玉川侑香・寺田操・永井ますみ・中堂けいこ・野元正・福永祥子・水



神戸文学館 作品展示

こし町子・西海
ゆう子・坂東里
美・山本眞弓）
来年からさ
らに多くの会
員の方々の出
展をお願いし
たいと思う。ど
うぞ気楽にご
参加ください
ますよう……。

（担当：福永祥
子・福田知子）

■たかとう匡子さん講演 「安水稔和の人とその詩の世界」

文 福田知子

ポエム&アートコレクション会期中の1月13日(土)、神戸文学館での来年の阪神淡路大震災30年記念イベントに先立ち、詩人・安水稔和を取り上げることになり、たかとう匡子さんに講演を依頼した。

たかとう匡子さんは、古くから安水稔和さんと親しい詩人。なので、私たちの知らない安水さんについて、その詩はもちろん、その人となりもお話しいただけるだろうとの思いからであった。当日は51人の方々が集まり、盛況の内にもじっくりとお話を伺うことができた。

たかとうさんの講演は3つの内容であった。一つには「初期詩集と安水稔和という人」、二つには「菅江真澄と安水稔和」、三つには「阪神淡路大震災のこと」。

まず、初期詩集について。第一詩集「存在のための歌」

(1955年)、『愛について』(1956年)、『鳥』(1958年)の三冊がそれらにあたる。この三冊に共通しているのは、「これらは安水さんの原石であり、源流であり、鉱脈でもある。キラキラ光る才能があらわれている」ということ。それらについて、「一つの詩『街の歌』(『存在のための歌』)と、『鳥』(『鳥』)を読み解きながら、語られた。

それらの特徴は、安水詩の資質として、一つに、一行の詩が短いこと、二つには、1・2・3……とパート毎に構成され、書かれていることの二点をあげられた。

きわめて短い言葉の行や、一つの単語でさえ句点をつけて、一行としているなど、ここには独特の息遣いがみられる。短い言葉で区切るのには、草野心平もそうであるが、安水さんの詩は心平ともまた違う。主題を追いながら、リフレイン、対比などをしっかりと入れながら、定型詩のリズムをつくっている」と述べられた。

また、これらは、初期の詩篇すべてに共通した特徴であり、短い詩を句読点を多用することでさらに短くしていることを強調され、とくに第一詩集の『存在のための歌』は、内部に視点を置いていることに特徴があり、言葉もやさしく、一見、簡単そうに見えるが、安易に真似すると必ず失敗することも強調——ここで会場の観客にひそかな笑いがおこる……きつと安水詩を真似した人もおられたのだろう。

さらに、たかとうさんは語られる。第一詩集が出される前年1954年3月に安水さんは大学を卒業。しかしなぜか就職せず。翌年1955年11月に就職し、『存在のための歌』が刊行された。そうした複雑な時期に書かれた詩篇には息が詰まるような重さ、暗さ、焦り、せつなさなどを感じられる。しかしながら、不思議な力強さがそこにはある、と。

続けて、詩集『鳥』についてたかとうさんは次のように語られた。あくまでここでの鳥は「記号」であると。「鳥たち」と複数になるとそれらは「声」になると。修飾語を加えると具体的にイメージされる。ともかく、『安水稔和詩集』(現代詩文庫21)に掲載された初期三詩集の衝撃は大きい。

それから、当時の神戸詩壇の様子にも触れられた。旧新聞会館7階に詩人・君本昌久の詩の教室があり、松尾茂夫さん、安水稔和さん、たかとう匡子さんたちが通っていた



講演するたかとう匡子氏

時代があった。その頃、君本昌久さんは「手」の詩ばかりを、安水稔和さんは「鳥」の詩ばかりを書いていた。195

8年草野心平主催の「歷程」に参加したばかりの頃だった。安保闘争も終焉を迎える1960年6月に、君本昌久さん、安水稔和さん、伊勢田史郎さん、中村隆さんたちの4人詩誌「蜘蛛」が創刊、1965年6月まで続いた。

安水稔和さんと彼のライフワークでもあった江戸時代の旅行家・菅江真澄との出会いもその頃であった。安水さんは佐渡の帰りに『菅江真澄遊覧記』(東洋文庫)を古書店で見つけ、たちまちその虜になったという。「西馬音内にしもない」「異国間(いこくま)」「記憶めぐり」は菅江真澄三部作となった。

時間の関係もあり、阪神淡路大震災後の安水稔和さんの仕事については割愛された。資料として、2023年1月16日毎日新聞に掲載された安水さんについてたかとうさんが書かれた追悼記事「阪神大震災 書きつづけ」という記事を配布された。

そこには「書いても書いても書ききれないという表現者としてのもどかしさが伝わってくる詩の言葉はさりげなく削がれ削がれて(砕けた瓦礫に)そっと置かれた/花の/くやしき」と四行詩にまで凝縮された。ここには(略)物に人の営みを重ねて語る安水さんの表現者としてのこだわり、手法があり、物書きとしての執念さえ伝わってくる。地元神戸のひとつの時代が終わったようで寂しい。」と書かれている。

安水稔和さんは享年90歳だった。同時代の詩人のなかでは長生きされ、多くの作品を残された。西馬音内など、「地名」に関する作品だけでも500作品もある。多作な詩人であった。

■第25回読書会 「鳴海英吉の詩の世界」 チューター 玉川侑香

文 永井ますみ



11月25日(土)、神戸市中央区文化センターで
講演する玉川侑香氏

んながそう思うぐらい／旨そうな ぶら下がりが方だ
／ぶら下がっていたらどろ柳から死体を下ろし／ふと
ころにあった遺言状を破って／マホルカ煙草の巻紙
にしたから／遺言状は白い灰になった／文面はなん
だったかと聞いてみる／そう言えば 帰りたいと
書いてあった／そのところだけは覚えていたが／
宛名は誰か知らないと言った／

自分の感情を入れない描写と、その時の状況を書きこむ
事で「鬼」となった一人の兵士の思いや、それを見つめる
自分を含めた兵士の有様をそのまま読む者にぶつけてく
る。「雪(1)」、「雪(2)」では死んだ者を生きている者が
葬る話が書かれている。敗戦の年連れて行かれたシベリア
ではその冬、全日本人抑留者の死亡者約六万人のうち、約
八〇%の人が亡くなったという。「雪(8)」では戦争で(凍
傷で?)片足を無くした兵士が雪の上を這いながら食を求
める有様が書かれているが、おれとおまえが混在した状態
で終連を迎える。

おまえはなにも答えない／上眼づかいで おれを見
あげる／いもの皮 けもの骨をくだいて食った／
結構うまかった／片足のないおれ／本当は死んでも
よかったんだ／しわがれた声で はじめて口を開く
／笑っちゃう／

後半の詩「花」「髭」「歌」は現地の人との交流だ。国と
国は争っても個人と向かい合ったら愛を感じる。それが人
間と言っているようだ。

一九四七年八月帰国。演劇学校へ入り、後には演劇の指
導などをしているが、一九六一年日蓮宗(不受不施派)の
研究に没頭して詩のグループには入らず、詩人会議に入会
して再び詩を書き始めるのはその約十年後になる。

玉川さんと鳴海英吉との出会いは彼の詩集『定本 ナホ
トカ集結地にて』が青磁社から出版されてからで、東京で
出会い、詩を書いているなら見せると言われて、見せたら
散々貶されたとか。彼女は三十代半ばの書き始めの頃であ
ったらしい。

会場に感想や意見を求められて、「石原吉郎は帰国後し
ばらく詩が書けなかったらしいが、鳴海英吉もそうだった

のだろうか」と質問する十二月に亡くなられた大橋愛由等
さんの声がビデオに収録されている。「丁度六〇年安保と
七〇年安保の時代に当たるけれど」と他の質問者の声も
あったが、「その期間は日蓮宗(不受不施派)の研究に没頭
していた。その宗派は豊臣政権の頃から、権力に靡かない
反権力の宗派だった。作品の制作年をみても、この時の作
品はないので、宗教の研究一本だったのでしょうか」という
事だった。安保に関連していなくても彼の姿勢は反権力・
反戦で終始一貫していたという事だ。また、帰還の際には
一緒に居た仲間、死んだ仲間たちの名簿を水筒の中に入れ
て持ち帰り、各地を訪問して歩いたと言う。持ち帰る事自
身が厳しく規制されていたので、この一事で彼の兵士たち
への思いが分かる。私にはこの一事が一番感動的だった。

「彼は『鎮魂歌は書くつもりはない』と言っているが、
今回資料にある『雪』などを読むと鎮魂歌にしかみえない。
書いたら結局は鎮魂歌になっているのではないかと」とい
う声に「鎮魂という、仲間と自分の切り離しては無く、鳴
海英吉も同心であるという事ではないか。彼は、シベリア
で死んで抜け殻が帰って来たと言っていたので、『死んだ
兵士達を書くことの役割として自分が生かされた』とい
うなら、鎮魂とは少し違ってくると思う」と応え、玉川さん
は資料最後の「さよなら」の詩を朗読して(シベリアから
船が離れる時の感慨を書いたもの)「これがもしかしして鎮
魂と鎮魂でない詩の境目かも知れない」と話された。

会場から鳴海英吉と玉川さんとの関係を問う声があつ
た。「まだ若書きの頃に知り合ったので、詩篇を見せては
『対象をちゃんと見ていない』とよく言われたけれど、先
生と生徒という範疇ではないと思う」

鳴海英吉は何かあると自作詩を朗読していたという、し
かもテキストを持たず。これこそ玉川さんが彼から受け継
いだ詩朗読スタイルの一つだったのではないか。

今回講演の動機として、鳴海英吉研究家の堀まどかさん
との出会いと、今後に託す気持が語られた。掘り起こし検
証する若い人が出て来る、しかも詩の分野であるというの
がとても喜ばしい事に思う。

当日ビデオで記録していて、再度聴き直しながらレポー
トを纏めました。

11月26日 参加者26名

私が今の同人誌「リヴィエール」の前身「月刊近文」に
居た頃、主宰の伴勇さんに「玉川さんて鳴海英吉の娘なん
か？」と訊かれた事がある。私はまだ神戸に十分なじんで
なかったで、「さあ」と答えるしかなかったけれど。
伴さんは鳴海英吉と同年代の私の親世代で、戦争体験も
よく話していた。中国戦線だったと思うが、親の話と同様
いい加減に聞いていたのが悔やまれる。
玉川さんの講演だが、鳴海英吉の詩集『ナホトカ集結地
にて』の詩の朗読と共に彼のシベリア抑留を中心にお話を
された。資料として出された詩がある。引用したいがどれ
も長いので短めの「鬼」を。

ぶら下がっているのは あんこうではない／ぶら下
がっているのは 兵士だった／ぶら下がっている
のは 人間だから／寒い風にふかれると ぶらりと
揺れた／あんこうは吊るし切り 鍋にして食う／皆

【予告】2024年ふれあい文化の祭典
「詩のフェスタひょうご」

10月6日(日)13時30分~16時30分(受付13時から)
ラッセホール 5階「サンフラワー」
〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-10-8
TEL 078-291-1117

主催 ふれあい文化の祭典詩のフェスタひょうご実行委員会・
兵庫県・(公財)兵庫県芸術文化協会・兵庫県現代詩協会

講演会 演題「今、詩のある場所」
講師 山崎佳代子氏(詩人・翻訳家)

- ◆1956年石川県金沢市生まれ、セルビア在住。
主な著作『みをはやみ』『黙然をりて』
『ベオグラード日誌』(読売文学賞随筆・紀行賞)

9月25日(水)までに葉書で申し込んでください
申込先 〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町4-4-5-902 野口幸雄宛
(住所・氏名/ふりがな/電話番号明記のこと)

【予告】第26回読書会

2024年8月3日(土)
13時~

神戸市中央区文化センター
1102号室

「山崎佳代子さんの詩心」
チューター 季村敏夫

■文学紀行

文 高木敏克

三月十日(日)は「第十回文学紀行」大西隆志氏企画による「文化薫る芦屋の街ぶらり歩き」。

集合は阪神芦屋駅十時でしたが、遅刻者もいて旅団は最初からさまざまよい気味でした。鶴塚橋で芦屋川を渡り、先ずは「虚子記念文学館」へ向かい、学芸員さんの正確な解説のもと「青歌と虚子展」も含めて閲覧では様々な新しい発見もありました。昭和六年四月の青歌第一句集『萬両』刊行記念祝賀会の写真では前列に虚子と青歌が正座していましたが、かなり小柄のお二人には驚きました。また、「芦屋市谷崎潤一郎記念館」では「冬の特別展」が開催していました。印象深いのは谷崎の女性関係であり小説より奇なる写真群が彼の素性を明かしているようで、特に谷崎の「脚フェチ」は我慢ならぬ程の重症で、庭に作ったプールで当時では珍しいアーティスティック・スイミングの演技会を行う程で呆れたと言いつつ羨ましい。「冬の特別展」では「谷崎が棄てた細雪」という反古原稿の展示がありました。谷崎が書き棄てた「細雪」下巻は従来の物語展開を大きく狂わせるもので、これも彼の女性乱脈関係が小説を書き換えさせるような妖気漂う気配です。明らかに虚構の上に現実を重ねてさらにその上に虚構を重ね塗りするという独特の作法が垣間見えたようです。これも羨ましい限りでした。

それに比べると、あまり羨ましくないのが「富田碎花旧居宅」でした。大切に現物保存されているのは二階に上る裸の階段だけでしたが、「裸の怪談ですか?」と聞き返す程の怪しさ。その横の碎花老人の風貌は白髭が風に靡くほどに伸び尽くし民衆派詩人の元祖とも言うべき懐かしさが漂っていました。お屋敷の蔵書には皆様殺到して写真採りをしていました。

「ぶらり歩き」というよりはランボウの酔いどれ船。船頭の船尾につけるアーティスティック・スイミングの様。運動不足もこれで解消して食事も進みました。

参加者は青木佐知子(以下敬称略)、安西佐有理、大西隆志、神田さよ、高木敏克、高谷和幸、玉川侑香、永井ます

み、中嶋康雄、西海ゆう子、野口幸雄、森田美千代、山下輝代でした。
大西隆志氏のナビゲーションも天晴れなものでした。



上、虚子記念文学館 下、谷崎潤一郎記念館



■会員の詩集から

文 時里二郎

○坂東里美「考える脚」(遷標三年一二月刊)。前詩集『変奏曲』に続く第四詩集。坂東さんの個人誌『Contralto』は、いつも楽しみにしているのだが、今度の『考える脚』所収の作品も(すべて確認はしていませんが)その個人誌に発表してこられたもの。

「亥wildboar」という作品は、「がいて理科室の骸骨は子供たちが帰った時刻に咳をしても深刻なひとり/いのこり/最終ランナーの空虚を堪能する/玄人」で終わる。

おわりのように、「ガイ」とよむところから「がいて」と始まり、「骸骨」「時刻」「咳」「深刻」「玄人」と、「亥」という部首を使った漢字を繋いでいく。「いのこり」は「亥」からきている。それに尾崎放哉の句を動員される。あるいは「踵heel」という作品は、「千里を駆ける駿足/勇者アキレウスにも/たったひとつの弱点があった/ホメロスはおしゃべり好き/物語は頁を重ね」「踵」をよく観察すると「足」「千」「里」で出来ている。そこから詩が動き出す。ナンセンスだが、そのおかしみには、漢字や文字とい

う不思議な宇宙を編みだす言葉そのもの世界へのオマージュが滲む。もう一つ「愛」という作品。「天窗を少し押しあげて／ソツと覗いている／この心臓の鼓動を誰にも／覚られないうちに／タタタと走って／逃げるか／あるいは／又」。これはもう解かなくてもおわかり？ 白眉は「天窗を少し押しあげて／ソツと覗いている」というのが「愛」の一画面から四面目の「ノ」「ツ」＝「爪」の視覚的連想から来しているところ。

後書きに「文字や言葉たちが元来の意味から離れて別の新しい世界を形作る詩が書きたかった」とある。藤富保男の詩の世界の影響を受けながらも、本来は詩を書くためのパースである文字や言葉そのものを解体し、組み替え、自在な想像力を加えて未知な詩の領域を拓こうという試みに大いに注目した。

○たかとう匠子「ねじれた空を背負って」(思潮社三月刊)。前詩集『耳風ぎ目風ぎ』から四年目となる新詩集。また、『私の女性詩人ノート』三部作が二〇一七年から二三年にかけて書かれていたから、それらの批評の営為と並行していることの意味は小さくない。思えば、その驚異的な創作意欲にまずは驚くが、それ以上に、今度の詩集は、今までとははつきりと一線を画す創造の飛躍を感じさせる。それは『私の女性詩人ノート』の批評の営みが大いに関わっていると私は思っている。

前詩集『耳風ぎ目風ぎ』について、この欄で次のように書いた。

「任意の頁を開くと、身体の不具合、違和感、病的な症状や感覚につながる表現がある。それは、一方で身体的な感覚を言葉の受信機として、世界や現実との違和感を増幅していく。あえて言えば、『女生徒』までは、現実世界やものを見つめ切ろうとする眼差しが、重層的なイメージや喩法に磨きをかけて、たかとうさんの詩のスタイルを生み出してきた。しかし、この詩集においては、さらに、その現実の向こう側に広がる深い闇や混沌と向き合う言葉が特徴的だ。言い換えれば、迷宮化をくわえたイメージやカオスのごとき深みに、自らの言葉と降りて行こうとする凄みを、表現の端々に感じるのである。あえてそれを幻視の眼差しといってもいい。それまでの詩集にはない自在な幻視的な言葉の運動は、一段シフトを変えた新たな詩的達成を

目指しているかのようだ」

引用が長くなったが、「現実の向こう側に広がる深い闇や混沌と向き合う言葉」を頼りに、たかとうさんがますます「迷宮化を加えたイメージやカオスのごとき深みに、自らの言葉と降りていこうとする凄みを」感じたこと、それが「自在な幻視的な言葉の運動」を生み出したことを指摘したのだが、今度の詩集において重要な展開と言えるのは、現実のカオスに対して「向き合う」のではなく「ゆるやかな闇の坂道に誘われて滑り下りたとき／わたしはすなにおに／そのまま昏迷を行こうと決めた」(「よるべない地図に誘われて」部分)と書いていること。「昏迷を行こう」とは、昏迷に身を委ねていこうということである。「向き合う」とは明らかに違う。

詩集は、全編にわたって、通奏低音のように、大戦の惨禍や阪神淡路大震災や東日本大震災やコロナ禍などなどの、混沌とした不穏な喩の、象徴的な表現に充ちている。このあたりのディテールの描写も揺るがない。抽象と具象の絶妙なイメージの溶け具合は、たかとうさんならではの特徵である。

いちばん大きな変化は、言葉に身を委ねようとしているところ。それはどの作品においてもはつきりと認められる言葉の論理ではなく、言葉の身体に自らを委ねているようになりズムと運動。自らの言葉で混沌とした世界に向き合うのではなく、世界が吐き出す言葉の混沌とともに生きようとする。

いちばん感動的なのは、そのように「昏迷」を行こうと決意したとき、その決意が、戦時下に亡くなった妹を呼びさますところである。

予測できない時間にむしばまれて

滑り落ちてきた観覧車のなか

ひよっとしてあれは

ねじれた空を背負ったわたしの妹

と見えたが

眼を凝らすと無人

走り去っていったのは誰(遁走曲)部分

「昏迷を行く」とは、「ねじれた空を背負う」ということである。それは空襲で亡くなった妹の不条理な死(生)を自らの生と重ねる営みでもある。

詩の批評でつちかわれた、詩人と詩の話者とが交わしあ

う眼差しの相違と、それがもたらす言葉のゆらぎのなかに、確かなポエジーの震えが感じられた。出色の詩集である。

■常任理事会報告

文 神田さよ

【第3回常任理事会】

10月28日(土)15時～ 神戸市中央区文化センター1112号室 出席者11名、欠席者1名

*9月、10月会計報告

*会員拡大に向けての活動(詩の講座)について

①いなみ野学園内「言葉の談話室」大岡信、荒川洋治の作品を取り上げた。作品創作はしない。

②ひょうご詩の講座 10月8日(日)第1回。チューター 時里二郎。会員以外14名が参加。参加者の詩の合評。次回11月12日(日)チューター江口節

③宝塚詩の会 次回11月12日(日)宝塚市中央図書館。テーマ「現代詩入門」

*会報・会報アーカイブ 11月30日(木)発送。特別号II 会報50号までの内容一覧と抜粋記事を載せ終了。

*読書会について 11月25日(土)13時～ 神戸市中央区文化センター1002号室。チューター玉川侑香、テーマ「鳴海英吉の詩について」

*ポエム&アートコレクションについて ▼展示2024年1月9日(火)～16日(火)、神戸文学館。参加費1点500円、2作品まで可。搬入時に納入。▼講演会 13日(土)14時～、講師IIたかとう匠子「安水稔和の人とその詩の世界」▼詩の現在展 会員の詩誌・詩集の展示

*ホームページ 今村欣史会員のエッセイを掲載。その他新情報などをアップする。

*文学紀行について

3月10日(日)に実施。阪神芦屋駅東改札口、10時集合。参加費3,000円(昼食代含む)

【第4回常任理事会】

3月16日(土)13時30分～ 神戸市中央区文化センター1007号室 出席者10名、欠席者2名

*入退会報告 退会2名(山本彰子・入間しゅか)、入会1名(北口義昭、12月28日入会)、逝去1名

*会計報告 未納者現在3名

*読書会 「鳴海英吉の詩について」チュウター玉川侑香 参加者24名、報告者永井ますみ

*ボエム&アートコレクション報告 来場者135名、特別イベント・講演会参加者51名、作品出展数17点、作品参加者17名。来年度は神戸文学館の都合により、3月25日(火)から4月1日(火)まで行う予定。

*会員拡大に向けての活動(詩の講座) 報告

①宝塚詩の会 第3回「現代詩講座」詩をよんでみよう書いてみよう」報告 2月11日(日)宝塚市中央図書館、テーマ「現代詩入門」、参考図書辻征夫著『私の現代詩入門』、参加者数9名+担当者2名

②いなみ野学園内「言葉の談話室」 自治会のクラブ活動の範囲になった。

③ひょうご詩の講座 これまで5回実施、3月17日(日)で今年度終了。新会員は4名入会の予定。

*日本現代詩人会セミナー2025 in神戸 実行委員会報告

*文学紀行報告「文化薫る芦屋の街ぶらり歩き」参加者13名、報告者高木敏克

*会報発行 次号55号

*第28回定期総会について 5月6日(月・祝)神戸市中央区文化センター 講演会講師 編集工房ノア社主・瀧沢純平氏に依頼。懇親会を行う。

*詩のフェスタひょうご2024について 2024年10月6日(日)13時30分、ラッセホール・サンフラワ

ー。講演者第一希望の山崎佳代子氏より快諾を得る。

*2024年度 理事会 4月20日(土)13時30分、神戸市中央区文化センター1101号室。出席者13名、欠席者2名

*入退会報告 退会2名、入会3名(有松きょうこ、佐々木晶子、土居靖子)

*会計報告 3月会計報告

*第28回定期総会について 総会資料について検討し修正した。

*同・懇親会について 場所中華料理・好味園(貸切)、17時。会費男性3800円、女性3600円

*神戸市文化協会への会費納入について

他団体会報(2023・10〜2024・5)

高知詩の会通信29号

山形県詩人会会報第39号

千葉県詩人クラブ会報No.264

福島県現代詩人会報第133号

岡山県詩人協会だよりNo.40

宮城県詩人会会報第35号

中日詩人会会報No.209

群馬詩人クラブ会報No.327

福岡県詩人会No.1888

栃木県現代詩人会会報第80号

近江詩人会詩人通信3月

茨城県詩人協会会報No.37

千葉県詩人クラブ会報No.265

関西詩人協会会報第113号

宮城県詩の会会報復刊53号

埼玉県詩人会会報第105号

詩誌

アンソロジーいろはにほへど

(福井県ふるさと詩人クラブ)

茨城詩人選2023

宮城の現代詩2023

鹿児島詩集

(第二十七集二〇二三年版)

木立ち 冬第147号

(福井県詩人クラブ)

秋田県現代詩年鑑2024

詩創57(鹿児島詩人会議)

岐阜県詩人集第11集2024

24福島県現代詩集

三重詩人263

会員の詩集・詩誌

たかとう匡子『ねじれた空を背負って』 木想第14号(高橋富美子)

現代詩神戸285(永井ますみ) ア・テンポVOL64(玉井洋子) プラタナスVOL72(玉川侑香)

多島海4(江口節)

風の音2号(野口幸雄)

汽水湖5号(福永祥子)

日曜日の旅人4号(神田さよ)

鶴鶴21(江口節)

応募案内

【第30回中原中也賞】応募締切令和6年12月8日

令和5年12月〜令和6年11月に刊行された詩集。

山口市交流創造部文化交流課Tel083-934-2717

【第35回富田碎花賞】応募締切令和6年7月31日

令和5年7月〜令和6年末に刊行された奥付のある詩集。

芦屋市国際文化推進課 Tel079-38-2115

入退会・ご逝去

入会 北口義明・有松きょうこ・佐々木晶子・土居靖子

とし総子・松浦三津子・森野とうが・山根智行

逝去 大橋愛由等・和比古

会員の活動

「近所の福永祥子さん」

文 飯島小百合

雨やどり

福永祥子

ポプラは背中をまるめ 歩道はでんぐり返る

横殴りの太い雨が 通りを駆け抜ける時

傘を持たない私は 足先をびしょ濡れにして

軒下へばりつく

雨足は 強ければ強いほど

駆け抜けるのは速い

それを知っているから 面をあげて待つ
辛いことが 強ければ強いほど
怒にかわるように 目が逸せない
雨足の駆け去る一瞬を
決して見逃さない

1980年10月発行の「パンの花」に掲載。詩作表現に悩む祥子さん、小野十三郎氏より「自身の内面を表現する事で、あなたの想念がありありと浮かんでいる」と、褒めて戴き詩を書く、表現する喜びを見いだせたエピソードを聞いている。

さて、次に長く地域でお世話になっている「ご近所の祥子さん」を紹介したい。

須磨区でギャラリー&ポエム「あいうゑむ」を営む。木製のドアに触れるとカランコロンとチャイムの音と同時に「あら」とびつかりの笑顔で迎え出される。そこに行けば祥子さんに会えるから行くし、また、あらゆる芸術的センス、自身を語るなにかを持った人が集い合い繋がっている場である。

さて、この3月末に詩学舎の同人誌「汽水湖」第5号の発行となった。毎月第3木曜日の午後となるとメンバーが集いあう。この4月のテーマは「電話」。3月に提案されたテーマに1ヶ月間、生活を営みながら悪戦苦闘、ふと、閃いたイメージを膨らませる。電話といえはコミュニケーションツール、懐かしい昭和の時代に戻って様々な作品が揃った。祥子さんは、毎回皆の作品を集め、印字し、冊子の作成を手掛け個々に渡しその日を迎えられる。本当に有り難い。

祥子さんの第一声で始まる勉強会、昨年から初めに5分間スピーチ。どのような話が聞けるか楽しみな一コマになっている。

「それではテキスト作品の発表」と、次に進む。今回は全13作品。まずトップに発表はTさん。「告白のいろいろ」である。

「天気の良い朝 桜の新芽を見ましよう」と カーテンを開けてみる

桜の小枝に ひよどりが一羽、止まっている」

で、はじまる。Tさん大きなはつきりと優しい声、28行で一篇の詩は5連で構成。発表作品には参加者が素直な意見感想を伝える、感じたまま言葉で表現する事は困難であるが人の考えを聴く訓練になる、回を重ねて、ズバリ言い突かれて言葉に詰まる場面もある。その細かな微妙な気持ちの機微を察知して祥子さんがひと言感想とともにアドバイス、そのひと言が場を和ませ、反対に鋭くも厳しい批評となる。そんな時こそ考えも深まる。この日の参加者は8名。一人ひとり「詩を作り、書く、発表、意見を交わす」交流の場になった。私がこの詩学舎に加わり5年、判りえなかつた意味が少しずつ深まっているようだ。何事も持続は力となる。ありきたりの表現でしか文章を表せず歯がゆくもどかしい。月に1回のこの日常は必ずや芽が出て花が咲き実を結ぶと信じる。

最後に祥子さんの最新作品を紹介して終わりにします。ありがとうございます。

時のタネ

福永祥子

しばらく待っていてよう 見えてはいるが 聞こえては

こない

聴こえてはいるが 視えてはいない

何かを開くために 何かを閉じる

私はここにいます と叫んでみても

ここは何処? 誰もいない場所

わたしはやっと 日常を脱ぎすてる

支え合いながら 実は奪い合っている

浮かび上がってくるものは 捨てたはずの私の影

記憶はすべて曖昧で 辻褄を合わせるだけのために

さつさと片付けてしまふ 今日も昨日も

やがて 私の為だけに訪れる

静寂な黄昏時 どこか 深いところで

■新入会員の紹介

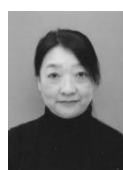
○土居靖子

住所 〒651-2274 神戸市西区竹の台6-6, 3-1-12

01 清水方

Email: yasuko78st@outlook.com

所属 詩誌「風の音」



どしゃぶり

いきなり雷

大粒の雨雨雨

用意周到に傘

最上級の武器持って

ゲリラと闘う

しぶきにまみれ

草も石ころも見えない

地面か 水面か

ひたすら前へ

逃げをうつつ作戦

ぐしょぐしょ

泣いているのではない

負けてもいない

一線を越えたら

なんてことない

潔く

折れた傘かかげる
水もしたたるいい女

○有松きょうこ

住所 〒651-0084 神戸市中央区磯辺通4-1-28
1910

所属 詩誌「風の音」

希望

まひる
白昼の

真空

沈黙を落とし

時を拾いながら

彷徨あらいている

世の隙間から

不条理を背負い

ただ時間に流されて生きてきた

人生の つけ を今払っている

あの小さなキラキラとしたものは

何だったのだろう

希望のカケラは

どこへ行ってしまったのだろう

手の平に き・ぼ・う・と書きつづり

そっと 声にする

それは ひかり になって

心のおくにポツと落ちた

○福島 優（筆名） とし（総子）

住所 〒675-0011 加古川市野口町北野619-45

花

心は花になるかしら

花は心に在るかしら

どこまでも続く闇一面に

一本の花が宿ることも

あるのかも知れない

晴れやかな日差しよりも

ほんの少し影に濡れた花弁のほうが

うつくしいかも

花は心に在るかしら

心は花を呼ぶかしら

○松浦三津子

住所 〒675-0011 加古川市野口町北野619-45

プロフィール

福永先生の詩学舎で詩を学び出して半年

楽しんで詩を書けるようになってきました

水たまの空

淡墨色の空と それを写した水たま

なんともものがなし

暮れ泥む空に 春の宵の残り香のような

水たまは うっとりとしたる

どれがいい？

水たまはこれほど色とりどりに

貴方の心を しとどに濡らしては

空中に飛んでいってしまう

数多 水たま

○山根智行

鳥取県在住

所属 『自由律俳句きやらばく』



ハサミ

僕は道具だ 人は言う

僕はハサミだ 使われて

本当は生きてる 叫んでる

心はあるんだ 僕は言う

刃は人のためだけの

ものではなくて ここにある

物ではなくて 喜びを

感じ味わう事も可能

僕はハサミか？ 違ってるぞ

僕は道具か？ ではなくて

僕はなにもにもなれるぞ

僕は母なる地で生まれてきて

君たち人間と同じもの

君たち人間と仲間だぞ

○森野とうが

西宮市在住

E-mail: z3morizou@gmail.com



々

いろんなものにくつついて
 いろんなものを
 いろんなままに繰り返す

たとえば
 々と

そっくり同じ顔をした鶏がいて

その隣

半歩だけ踏み出した鶏が

なに食わぬ顔でもう一羽いるといった具合

その隣

そのまた隣にも

胸を白く高く反らせた鶏がいて

ぼくを見ている

眼窩に紅い縁取りをして

射貫くような眼を落ち着きなく巡らせ

繰り返しの意味を教えている

あるいは忘れることの

意味を問うている

どちらも決して簡単ではないことを
 出会ったばかりのぼくに

繰り返し教えている

神経質で

ひたすらくちばしを突き立てる

がさつ極まりない忠告なのだが

どれほど難しいかいつてみると

いわんばかりの顔つきでもある

○佐々木晶子

住所 〒651-2242 神戸市西区井吹台東町1-4-1
 所属 詩誌「風の音」

スランプからの

数日間

詩を書くことに集中した

エコにさからい

原稿用紙を何枚もボツ

言葉が文字にならない

空を見た

山を見た

田んぼをながめた

思いと裏腹に

言葉がうかばない

くたびれはてた自分を

鏡に映した

食う寝る出すは

できている

悩むな考えよ

誰の名言か忘れた

今の自分に

必要な言葉

■新入会員をご紹介下さい

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行って
 り読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。

詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の
 方を求めています。

*入会申込先 野口幸雄 Tel 090-7963-0090

■ホームページにあなたのエッセイを

協会のホームページ「会員寄稿エッセイ」コーナーでは、

会員のエッセイを掲載しています。詩人との出会い、同人誌の思い出、研究している詩人の事、日常ふと心をよぎった事等々。積極的な寄稿をお待ちしています。
 ・会員ならどなたでも投稿できます。協会から直接寄稿をお願いすることもあります。

・エッセイまたは評論をお願いします。

・連載も可能です。投稿数が多い場合はあなた専用のページを用意します。

・読みやすい縦書き三段組み、縦スクロールで掲載します。

・既発表・未発表を問いません。ただし原稿は電子データでお願いします。(手書きの場合はご相談ください)

*ホームページ担当理事・北野(soranhi@yahoo.co.jp)まで、メール頂ければ、様式をお送りします。

■会計より

新年度になりました。今年もひきつづき会費納入をよろしく願います。なお、振り込みの際は本名とペンネーム、両方をお書きください。会費は4000円です。

*振込口座 00920・9・111243

口座名 兵庫県現代詩協会 (担当 玉川侑香)

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送ってください。「詩の現在展」として展示します。詩に関するイベント情報や会員の動静もお知らせ下さい。

◎兵庫県現代詩協会事務局 野口幸雄方

住所 〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町4-4-5

902 Tel 090-7963-0090

◎会報編集《高谷和幸》 Tel 079-4447-3652

◎印刷《遊文舎》 〒532-0012 大阪市淀川区木川東

4-117-31 Tel 06-6304-9325